

1985年第7回全国集会：香川県

久 米 修 (香川植物の会)

私の所属している香川植物の会は、設立以来2002年で30年目を迎える事になるが、1973年の設立当初から未だに明文化された規約も無く、全て総会での合意約束事で運営されているという奇妙な会である。植物の会と言うと山野草趣味の会の様に受け取られる時代であるが、まずその様な趣味の人は会の中で相手にしてもらえない。かと言って、流行のカルチャーでもないし、研究会と言うほど学問的なものを目指しているわけでもない。月に一度の定例会に数十人が寄り集まり、ワイワイガヤガヤと山海はもとより田の畦や河原を調査？して喜んでいる同好会である。

この香川植物の会が全国規模の集会の開催を引き受けたのは、後にも先にも水草研究会の第7回全国集会だけである。事の起こりは、1982年で、当時水草研究会の会長をされていた大滝末男先生が、倉敷市で開催された水草研究会第4回全国集会に参加された帰路、愛媛県の山本四郎先生と共に香川県に足を向けられ、香川植物の会の和気俊郎会長（もっとも、当時は会長さえ置いていなかった）と私を含め数人の会員で県内をご案内した。当時の香川県における水草への関心は、特別水草に注意が向けられていたと言うような状況ではなく、一般の陸上植物と変わらないものであった。それは特殊なものを除き、まだ身の回りにふんだんに水草は見られたし、分類や生態についても未知の分野が多い興味深い存在であるという認識が無かった為である。何よりも、水の中の事は解からないと言う思い込みがあった様に思われる。大滝先生の来県を機に、水草の観察の仕方や調査方法を教わった私たち会員の間で興味が深まり、香川植物の会としても水草の調査に取り組む事になった。改めて考えて見れば、香川県の水環境と言えばため池であり、16,000余り（当時）のため池数

は全国第3位で、これを捨てておく手はないと言う事である。早々香川植物の会会報に「水草をたずねて」と言う欄が設けられ、このコラムは今日まで続いている。私は、手始めに香川県の水生植物目録を既存資料から作成し、水草研究会会報10号に投稿した。私が県内のオニバスの調査を継続的に始めたのもこの年からである。香川県における水草熱の高まりの起源は全てこの年にあると言ってもよい。

水草研究会の全国集会開催の話が伝わってきたのは1984年の初め頃ではなかったかと思われる。詳細ないきさつは不明となったが、当時水草研究会の役員をしていた香川大学の納田美也先生から、全国集会の開催を引き受けるとしたら協力は可能かと言う打診があった。個人的な協力は厭われないが、どうせ引き受けるなら香川植物の会としてやろうと言う事になり、納田先生を中心に香川大学の須永哲雄先生（故人）、和気会長、私、大石泰輔、山下清重らが加わり準備が始まった。会場は、収容人数等から交通不便の地であるが坂出市の五色台国民休暇村五色山荘とした。日程は、1985年8月3・4日に決まり、3日は午後1時から56名の参加者により総会と研究発表会が開催され、4日は高松市近郊の水草を巡るエクスカッションが実施された。実は私は、全国集会前日に父が永眠した関係で、この集会に参加出来なかった経緯があり、詳細はわからないのである。地元発表と言う事で私も1題の発表を組み入れられていたのであるが、急遽朋友の大石泰輔氏に代理でスライド放映を依頼せざるを得なかった。やむを得ぬ仕儀とは言え、全国集会の準備担当諸氏を始め、当日お手伝いいただいた香川植物の会と四国学院大学の皆さんには、大きな迷惑をかけてしまった思い出である。この集会の概要は、水草研究会会報21

号に納田先生が報告されている。

と言う次第で、今回は、全国集会のエクスカーションで見学した場所の、現在の水草の状況について報告したい。

水草研究会会報によると、3日の総会終了後五色台にあるタンベ池の水草を見学したと記されている。タンベ池は、香川県における典型的な山池で、当時はウキシバ、ヒルムシロ、ホソバミズヒキモ、クログワイや減水期にはミズニラ、オオホシクサ、ヒメホタルイ、ハリイ類等が群生する県下有数の産地であった。その後タンベ池では、池堤の嵩上工事と浚渫工事が行われ、満水面が従来より高くなり、相対的に水深が深くなった状態である。その影響で現在は、抽水植物や減水期特有の植物が著しく減少し、衰退した印象を受ける。

エクスカーションの目玉の一つが木沢塩田跡のアッケシソウであった。当地のアッケシソウは、元々自生ではなかったが、広大な塩田跡地一面に群生するようになった経緯は、納田先生が前日の研究会で報告している（水草研究会会報21号に記載）。この木沢塩田跡では、その後塩分濃度の減少と共にヨシの繁茂が著しくなり、アッケシソウは衰退してしまい、現在は見る影もなくなってしまった。ヨシやハママツナの株の間を精査してやっと数株見つかる程度である。また、塩田跡地では、土地の有効活用として造成工事が始まっており、早晚埋め立てられる予定である。塩田の生き証人としてのアッケシソウは、塩田文化の終焉と共に消え行く運命にあったのかもしれない。

香川県の平野部を流れる河川の代表的なものとして、高松市内の3つの川を見学している。御坊川では、たくさんのナガレミズヒキモやクロモを観察しているが、都市部の中心にありながら現在も当時とあまり変わらない状態である。春日川の川添橋と吉田川の小村橋では、オオカナダモとクロモ、アイノコヒルムシロ等の見学であった。オオカナダモとコカナダモは、この当時香川県で急速に分布を拡大していた時期で、その内にクロモ

が駆逐されるのではないかと危惧する声さえあった。一時隆盛を極めたオオカナダモとコカナダモは、何故かここ10年ほど前から急に減少に転じ、あまり見かけなくなった。それ以上に河川域でのクロモの減少が著しい。同様に小河川でも随所に見られたヒルムシロやアイノコヒルムシロが姿を消してしまった。ヒルムシロやクロモの減少は、河川整備工事による河床整理と浚渫土の除去による事例もあるが、工事をしていないのに消滅する場合もあり、その原因は複雑である。

エクスカーションのもう一つの目玉であるため池の見学は、3箇所で行われている。女井間池では、香川県の水草の代表格オニバスが目的であったが、あいにくこの年には生育していなかった。女井間池のオニバスは、前年の1984年には生育していたのであるが、以降1997年まで確認されず、1998年に復活して2001年まで毎年大群落を造っている。五分の一池では、目的のイバラモが見られず、ウキシバも既に消滅していたが、ガガブタが記録されている。この池は現在、その一部に高速道路の橋脚が建ち、水質も富栄養化してアオコの発生が見られ、極少数のガガブタやホザキノフサモが生き残っているだけである。久米池の観察目的アサザは、現在でも健在であり、香川県唯一の産地となっている。しかし、水の富栄養化が進行しており、当時密生していたヒシ・オニビシ群落は壊滅状態で、クログワイやウキシバ、トチカガミも見えなくなった。

最後の観察地として新田町の用水路を訪ねているが、ササバモをはじめセキシウモ、ナガレミズヒキモ、コカナダモ、エビモ、マツモ、ミズオオバコ等の水草が密生していると記録されている。現在この用水路そのものは変化なく用水を流し続けているが、水草は見る影もなく、ナガレミズヒキモやコカナダモ、エビモが点在するだけで、密生していたササバモは全く見られず、セキシウモは貧弱なものが極少数かろうじて生き残っている。川底は数十センチメートルに及んでマシジミ

やカネツケシジミ、タガイ、ヒメタニシ等の貝殻が堆積しており、かろうじて残った水草にヒメタニシやサカマキガイが群がり付いている。隣接する水田にはスクミリングガイも生息していることから、この地の水草の衰退原因は、これら淡水貝類の食害によるのかもしれない。

以上、全国集会の観察地について、この16年間の水草の変遷の概要を紹介してきた。これらは、

香川県における水草相の変遷の一断面ではあるが、ここに紹介した様な水草の衰退傾向は全県的に見られるものである。特にこの数年においては、水の富栄養化に強いとされるヒシ類の消滅が目立っており、平野部だけでなく丘陵部のため池においても、水草が皆無となっている所が目立ち始めた。香川県の水草にとって、厳しい情勢がますます深まっている。



第8回全国集会(1986.9.2~3)福島県・裏磐梯

星 一 彰(福島県自然保護協会)

東北初の集会ということで、初代会長原田市太郎氏をはじめ多くの会員が参加し、裏磐梯の特異な環境についての理解を深めた。

現地研修会で、休耕田利用ジュンサイ栽培地でコカナダモが初確認されたこと、尾瀬沼のコカナダモについての講演が実現したことなどが強く印象に残っている。

マスコミ各社も東北初の集会を報道し、裏磐梯の水草と水質汚濁問題をクローズアップさせることができた。さらに尾瀬の富栄養化問題と、ダム

化により3mも水面が変化する環境破壊について活字化され、多くの福島県民が水草についての認識を深めることができた。

長瀬川水系

猪苗代湖に流入する最大の河川は長瀬川であり、猪苗代湖の水質は、この長瀬川の水質に大きく影響を受けている。集会場の裏磐梯地区は、長瀬川水系となっており、この地区の水質が猪苗代湖の水質に直接影響を及ぼしている。そして猪苗代湖